

短歌の勧め

吉原榮徳

『萬葉集』の全註釋書『萬葉代匠記』や歴史的假名遣の研究書『和字正濫鈔』などをものし、學問の近代化に力盡し給ひし契沖を顯彰す方便に、短歌大會を催し侍りぬ。そは、契沖の求めしは、「歌學」にあり、また若年頃より和歌を好み、親友下河邊長流の庶民の和歌興隆運動にも自ら努め給ふほどなればなり。

また、會の方針として、地域文化の進行が待れば、地域の兒童（小學生）・生徒（中學・高校生）に傳統文化の繼承と衰ふるてふ國語力の向上に役立てむと始め侍るなり。

覺束無けれど、市の教育委員會や校長會、そして現場の先生方の強い御力添へを賜はり、今では、「宮中の歌會始」に最年少での入撰者や四大國學者の一人、賀茂眞淵（一六九七〜一七六九）の出生地、静岡縣濱松市の市立縣居（眞淵の家號）小學校が全校上げての應募など市外の學校からの参加も増え、一萬人を超すまでに成り侍るなり。嬉しくは侍れど、我が望みは、歌詠む事を通して、己れで物をよく見、よく聞き、考へ抜く力を、また、見えぬものを見る想像力と己れの心を正しく傳ふる表現力を養ふ事なり。また、そが事に、大方の方々が、「しかり」と與し給ふやうなる世の中を創り出す事に侍り。

さて、本大會は、兒童（小學生）・生徒（中學・高校生）・一般社會人の三部に分ち各契沖大賞など二十二の各賞と佳作（契沖賞）を出せるが、試みに、第九回大會の兒童の部（應募者七九三三人）にて大賞（第一席）に撰ばれし尼崎市立武庫莊小學校五年生吉本夏菜さんの歌を上げ侍らむ。

ひゆるるるる そよそよよ ざわざわわ 耳をすませば 木の葉の合唱

歌意は、「種々の風の音の聞え來しに、耳を澄まして聞けば、そは、まさに木の葉の合唱にて侍るめり」とならむ。

歌作の動機は「木の葉に吹く風の音に氣附く。」、作者の位置は、「木立の多い所」、作者の心の展開は、「耳を澄ます。觀察。」發見は、「木の葉の合唱。見立て」などと明らかなり。

次いで、表現法にては、初句から第三句まで擬音語を用ゐたるは、風の具體音のやがて和音となり合唱への連想を容易にし侍り。また、句切れとなせるは、各獨立せし音の反復繼續を知らせ侍りぬ。また、音の反復での省略法の「る」、「よ」、「わ」は、震動音として音樂性を高め侍りたり。又、初句の「ひゅ」は拗音なれば、一音節に數ふる故に、「字餘り」とはなり侍らず。

なほ、結句の「體言止め」とせしは、自然との交感の喜びの表はれて良く侍り。

解明すれば、かくのごとくなれど、小五の兒童にかかる才覺は侍らず。しかるに、かく詠あるは、歌詠む心と優しき心の侍ればなり。されば、日本言葉を愛づる諸賢に坐せば、容易からむとて、作歌の誘ひをし侍るなり。